

2021年12月24日作成(2024年12月20日一部改訂)

義高 互

○テストの効果

2016年に中学校特支学級で担任した時のことです。

英語の学習をしており、何が効果がある学習法になるかを探っていました。その時テストをすることが学習効果につながる事を知り資料に残しました。

別項目参照

同じ特支学級のもう一人の生徒もテストを呼び水にして効果を上げる学習に取り組みました。暫くは上手くいっていました。一人の生徒は途中で学習をするのを拒否するようになりました。テストのプレッシャーに耐えられなくなつたようです。そこで彼がどの程度のテスト頻度に耐えられるか記録をとってみました。その生徒が耐えられるテストの平均回数は週一回一教科程度でした。その生徒の事を考えると、年間して一教科60回を大きく超えない程度にテストの回数を収めるべきだと思われます。

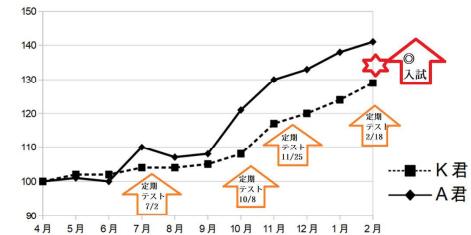
○テストと提出物の増加

テストや提出物の頻度について前の記録を調べました。1990年頃私が30歳前に教員をしていた時期の記録をさかのぼりました。その学校は僻地でした。平均で年37回のテストをしていました。提出物は一教科を一つを計算して39回の提出物でした。特支学級の生徒は年間60回のテストに耐えられます。テストの回数だけで考えたら1990年の通常学級でのテスト回数の耐えられるかも知れません。転勤して通級学級を担任した時、同じよう提出物とテストの回数を記録しました。2021年の中学2年生では、提出物は490 テストは142回にもなります。内訳は別資料参照

この膨大な提出物とテストの増加は、生徒によっては過重負担となり、大きなストレスの原因になっている可能性があります。

点検することを考えたら、教員にとっても過重労働のストレスと負担は重大です。提出物点検とテストの負担だけでも、30年前の数倍以上の負担となっている可能性があります。このような学校の状況は教員の精神疾患や長期の病気休業につながり、教員志望率の低下を招いているかもしれません。そして教員の休職やリタイアは義務教育の制度を崩壊させ続けていると考えられます。

1年間の学習効果(英語プリント)



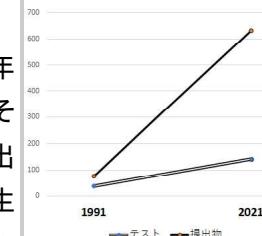
要支援 K君のテストの耐久回数

年間約60回程度

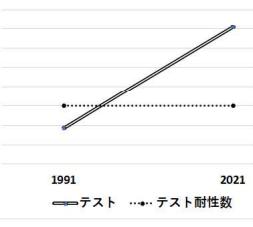
(合計60教科)

それ以上は耐えられそうにない

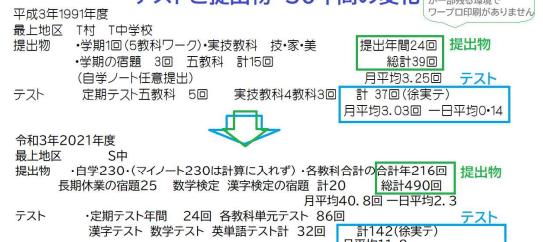
テストと提出物の増加



テストの増大と耐性



テストと提出物 30年間の変化



○登校

授業 過度なストレスと達成感 満足感
休み時間 リラックス
授業 過度なストレスと達成感 満足感
給食 リラックス
授業 過度なストレスと達成感 满足感

行事

授業外活動

増加



授業 過度なストレスと達成感 满足感
(授業外活動)
休み時間 手定外活動
授業 過度なストレスと達成感 满足感
(授業外活動)
給食
授業 過度なストレスと達成感 满足感

○登校

授業 過度なストレスと達成感 满足感 (授業外活動)
休み時間 手定外活動
授業 過度なストレスと達成感 满足感 (授業外活動)
給食
授業 過度なストレスと達成感 满足感

○下校

放課後活動

リズムある活動

リズムの前れ 過度のストレス
見通しが持てない不安
友人とも摩擦

○登校

ストレス反応
周囲の友人と摩擦が増える
定期的にこの状態が続く
ストレス反応の拡大と恒常化
その場所に行けない 意欲が落ちる 生活リズム崩れ

END